阿波の名医　福島義一

図1

いままで本シリーズで、徳島大学医学部や徳島県の医学および医療に貢献された医師を紹介してきている。その際、古き時代の様々な資料に大きく関わってこられた阿波の名医を、このたび選ばせて頂いた。

眼科学の教授を務められた福島義一氏である（図一）。氏は昭和一〇年、大阪帝国大学医学部を卒業し、昭和一九年四月、徳島県立徳島医学専門学校教授（眼科学）に赴任された。同校付属病院眼科医長も務め、昭和二〇年四月には官立移管された徳島医学専門学校教授へ。昭和二四年八月、依願退官され、蔵本キャンパスの近くで診療所を開設され、数多くの眼科の患者を診療し、地域医療にも貢献された。

その後、眼科の領域では、徳島大学医学部非常勤講師、徳島県眼科医会会長、日本学校健康会徳島支部審査委員会会長、財団法人徳島アイバンク理事長などを歴任された。

福島氏の業績で特筆すべきことは、日本の医史学における大きな貢献である。研究方法は常に現地を訪ねて資料を収集することで、精力的活動を眼科学教授として赴任された以降長年にわたり継続し、成果を多くの書籍や資料に残された。不断の研究によって、幕藩時代から明治・大正・現在に至るまで、多くの貴重な資料、人物等が埋もれることなく、医史学的に解明されたと高く評価されている。その結果、郷土医学史の研究に貢献した功労者として、日本医師会最高優功賞を授与された（平成四）。

氏は昭和三六年京都で開催された第六

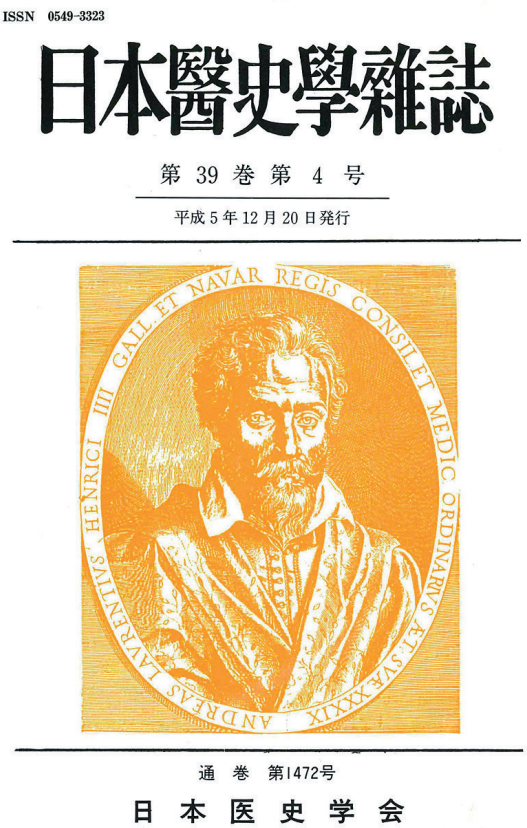

図2

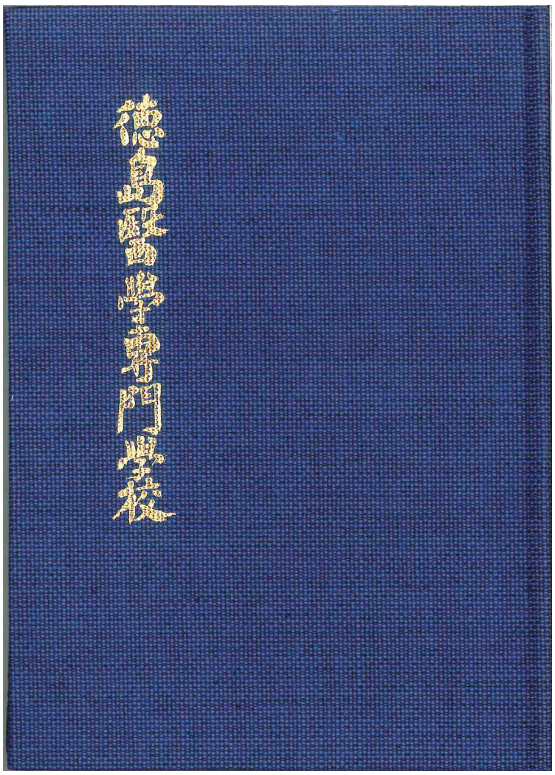

図3

図4

二回日本医史学会総会で、特別講演「日本眼鏡史の研究」を担当した（図二、文献一）。現在までに発表した著書や論文は極めて多いが、まず重要な数点について示したい。

「徳島大学医学部史一～徳島医学専門学校～」（一九八六）の中では、四〇年の昔を思いつつ、先人が幾多の困難を乗り越え、徳島医学専門学校から現在の徳島大学医学部へつなげてくださった歴史を概説している（図三）。また、当時、徳島医専と前橋医専の関わりや経緯に触れ、徳島医専の発展に尽くした中田校長と小山病院長を高く評価している。

「聞き書き・医者のみた阿波史・新阿波医人伝」（一九九二）について、当時、徳島市医師会史の編纂委員長として膨大な資料を収集していた。その中で、医師会史への掲載はなかったが、貴重な資料を本書で収集したのが本書である（図四）。福島氏は、阿波藩政時代の博物学の名著「阿淡産志」五七巻、「淡州出品筆録」一巻、「阿淡産志目録」一巻などが、東京国立博物館の所蔵と発見し、編集に携わった方々と内容を詳細に調査した。これは徳島県にとって極めて重要な文化財を、百余年振りに見出したことになった。さらに、賀川玄悦の業績、元阿波藩医井上肇堂による漢方医存続運動、高名な医師で蘭・英両国語に精通した学者でもあった井出三洋など、多くの逸話も含まれている。

徳島大学医学部五十年史一九九三（一九九三）は、長い歴史をまとめた徳島大学の歴史に加え、講座や附属病院、附属施設、学生生活、同窓会活動、医学科、

図5

栄養学会の同窓会活動などの情報についてすべてを網羅した貴重な書籍である（図五）。この中で冒頭の第一章創立前期については、福島氏が担当し解説を行った。

ほかにも多数あるが、主なものだけ列挙する。「日本眼科史」（昭二九）、「阿波医育小史・醫譚復刊第三〇号」（昭三九）、「阿波医学史」（昭四五）（図六）、「徳島県医師会史」（昭五一）、「阿波の蘭学者」（昭五七）、「阿波医学史（再販）」（昭六〇）、「眼科学史の窓」（昭六二）、「阿波藩撰博物誌阿淡産志の研究」（平二）、「医者のみた阿波史（徳島医専物語）」（平四）などが挙げられる。

京都における医史学研究史をみると、京都と徳島の交流が記されている（文献一）。賀川玄悦没後二百年記念行事の際（一九七七・九）には、日本産科婦人科学会や日本医師会、日本医史学会、京都府医師会、徳島県医師会などが協賛して顕彰会が組織され、顕彰碑除幕式や記念式典、講演会、資料展、記念誌の発行が行われた。翌年に建立された産論句碑では、玄悦を高く評価する水原秋桜子が「産論の月光雲をはらひけり」と詠んでいる（一九七八・六）。

図6

以上のように、福島義一氏は徳島の眼科の発展に尽くされ、さらに、徳島およびわが国の医史学の見地から大きく貢献し、まさに「阿波の名医」であった。

文献

一　第六二回日本医史学会総会・京都における医史学研究史Ⅱ（一九六一・一一・一一－一二、於京都）日本医史学会雑誌三八（一）：八五－一〇四、一九九二

一　片岡義雄：書評：福島義一著「聞き書き・医者のみた阿波史・新阿波医人伝」日本医史学雑誌（通巻一四七二号）、三九（四）：六〇〇－六〇一、一九九三

（徳島大学医学部同窓会青藍会会報第八九号：（二〇一七・六）、七七～七八ページ）

Dr. FUKUSHIMA Yoshikazu

Dr. FUKUSHIMA Yoshikazu (1910-1997) graduated from Osaka University (1935) and become ophthalmology professor of Tokushima Medical School (1944). Several years later, he opened ophthalmology clinic near the university and contributed community medicine. Furthermore, he served as chairman of the Tokushima Ophthalmologists Association, and chairman of the Tokushima Eye Bank Foundation.

His noteworthy achievement was his contribution to Japanese medical history, for which he was awarded the Japan Medical Association's highest merit award. At annual meeting of the Japanese society of medical history (1961), he gave a keynote speech for Research on the History of Japanese Eyeglasses. He worked numerous books and articles, such as "Medical History of Tokushima Univ (1986)", "Doctor's View of some biographies in Tokushima (1992)", and so on.

He has wrote many books, "Japanese Ophthalmology History (1954)", "Awa Medical History (1960)", "The History of Tokushima Medical Association (1965)", "Dutch study in Tokushima (1982)", "the History of Ophthalmology (1987)", " Historical Museum of the Awa Clan (2000)", and so on. Consequently, Dr. Fukushima contributed much for ophthalmology and medical history in Japan.